

---

---

## 臨床社会学の方法

### (33) その「ナラティブ」は誰の言葉なのか —沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声— 中村 正

---

---

#### 1. 問い—加害者臨床をしながら考えること

今号の内容は、『対人援助学マガジン』前々号（「臨床社会学の方法（31）男らしさを『聴く』-他者をとおして自己の欲望を実現させるコントロール行動の意識と態度-」第43号）と前号（「臨床社会学の方法(32) 怒りが暴力を振るわせるのか—感情を生起させる「憎悪・嫌悪」の構図とアンガーマネジメントの乗りこえ—」第44号）の続きである。

インタビュー、グループワークそしてセラピーあるいは何らかの自己についての語りで話されること（ナラティブ）はその人の言葉や声だろうかとか加害者臨床では考えてしまうことが多い。例えば、殺人罪で起訴された被疑者の情状鑑定のために拘置所に通いながら、刑務所で性犯罪者の再犯防止プログラムのグループワークに参加しながら、児童相談所と連携した虐待親向けの男親塾で父親の出来事の説明を聞きながら、DVを振るう男性の言い分や、ハラスメント行為者の説明を聴きながら、そう考え込んでしまう。時には聴取されるからと粹もあるが、雄弁に加害者は言葉を発することがあるからだ。説明を求められる機会が多いともいえるだろう。その際の声や言葉はどこからでてくるのだろうか。どうしてそう

したことをしたのか、暴力を振るう行動で何かを表現してきた加害者は、転じて自ら説明する言葉をどこから調達してくるのだろうか。それについて前号では社会が抱く集合的意識としての「男らしさ」の観念から調達しているのではないかと考えてみた。それと同様の問いをもとにして別の視点から考えてみたい。

加害者臨床での声と言葉は暴力行動が先行し、説明としては事後的である。内発的に語るようにみえる動機の語彙はあくまでも社会的に用意されたものだとすると（通巻第15号、2013年12月）、やはり声と言葉の出自は気になる。

#### 2. 寺山修司「邪宗門」を手がかりに

このテーマは私のなかでは通奏低音のように響いている。少し回り道を試みよう。寺山修司（1935年-1983年）の戯曲「邪宗門」から考えてみたい。

「邪宗門」のテーマは、演劇を演劇のフレームから演劇的な手法を用いていかに解放することができるかだ。全体が矛盾しているテーマなので不条理劇のようでもある。

1971年が初演とされているので、学園紛争の名残もある社会を背景にした歴史を感じる内容だ。主役は黒子である。真っ黒な

衣装を着て役者の演技を助ける人たちだ。始まる前から演劇が始まっている。たくさん黒子たちが客席や舞台の間をいたりきたりしている。何かをしているのだ。すでにこの時点でおかしさを感じる。舞台が徐々に照らし出される。大道具の間をやりせわしなく動き回る黒子たち(寺山の戯曲の台本には黒衣とされている)。開演までの間これが続く。黒子が観客に衣装を渡して合うかどうか確認しているようでもある。これは何なのか。舞台でも同じような光景。黒子が演劇の段取りをしているようにみえる。

その黒子たちが徐々に動きを一つにして何か「演技」をはじめていく。何かを引っ張っているようなのだ。この段階でも黒子が目立つ動きをしている。主役のように「操り-操られること」を「演じている」ようでもある。この演劇の主題を示唆するような独自の動きだ。普通の黒子ではない。役者を助ける存在の黒子が主役のようにみえると、先行きとても不安に駆られる。私は何を観てきたのだろうかとそれまでの虚構としての舞台だけでなく社会そのものの存在への不安が頭をよぎる。

さらに展開を予測する。その黒子たち、役者から自由になったら演劇や役者はどうなるのだろうか。ますます不安が昂じていく。しかし舞台はすすみ、普通に黒子を演じている時間も流れる。当然のようだが、役者の近くには必ず黒子がいて確かに演者の補助をしている動作もしている。

しかしどうみてもその黒子が彼や彼女を操っているようだ。通例の黒子のように役者を助けているとは思えない所作が頻出する。そのうち意図をもった黒子の存在に気

付いた役者もいる。役者が黒子から逃れようと格闘しはじめる。黒子と役者の関係が混乱しはじめる。なかには黒子に打ち勝つ役者もいる。そうなると役者はどう演技を続けられいいのか。黒子がいるからこそ衣装を替えることができ、台本通りに演劇が進行するはずだ。その演劇のフレームがなくなるとどうなるのか不安にさせるような舞台が続く。

そして最後の場面。通例の演劇のように明るくなり、役者が挨拶をして舞台が「終わる」はずだ。しかし予定調和はこの時代の演劇にはない。「邪宗門」はここからが真骨頂だ。さらに演劇は続く。登場人物たちが終わり近く交わす一連の会話が続く、どうやらこの芝居が作り物(つまり虚構)である事を語っている。幕の終わり、その脇役のはずの黒子たちは衣装を脱いで人間と化す。「こんな黒い衣装なんか着ていられるか!」といわんばかりに脱ぎ捨てる。主役だったその黒子たちが何かに操られていると話し合っている。

黒子を操っているのは「言葉よ」と誰かが言う。「じゃあ、その言葉を操っていたのは一体誰なんだ。」と問う。「それは、作者よ。」と応える。しかしその作者を操っていたものがあるはずだ。「それは、夕暮れの憂鬱だの、遠い国の戦争だの、一服のたばこのけむりよ。」と続く。そしてさらにこれらを操っていたのは時の流れ。時の流れを操っていたのは、糸まき、歴史。いいえ、操っていたものの一番後にあるものを見る事なんか誰にも出来ない。たとえ、一言でも台詞を言った時から、逃れる事の出来ない芝居地獄。終わる事なんか無い。どんな芝居でも終わる事なんか無い。ただ、出し物が変わるだけ。さあみんな役割を変えましょう。衣裳を脱い

臨床社会学の方法(33) その「ナラティブ」は誰の言葉なのか  
—沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声—  
(中村正)

で出てきて頂戴。森崎偏陸さん、黒子の衣裳を脱いで出て来て頂戴！下馬二五七さん、シーザーさん、佐々木英明さん、書き割りの絵の後には渋谷公会堂のコンクリートの壁、そのうしろには、冬のさむい街が見える。

蘭妖子さん、・・・サルバドール・タリさん、・・・ヘンドリックさん、昭和精吾さん、・・・寺山修司さん、さあ、みんな出て来て頂戴！この声と共に地ひびきをたてて「邪宗門」の虚構、舞台装置はガラガラと崩れる。崩壊してゆく大道具の背後から、この劇の登場人物たち、続々と素顔で、じぶんの言葉で観客に向かってしゃべりはじめる。・・・黒子ら口口にしゃべりながら、舞台を叩きこわす。目つぶしの照明の中で、アジるもの、叫ぶもの一すべては即興的で、しかも暴力的に、一時間持続してきた虚構をくつがえすのである(寺山 修司(著)/白石征・山口昌男 監修、監修『寺山修司著作集』第3巻 戯曲、クインテッセンス出版、2009年より)。

こうして劇場での芝居はもう終わりと、娼婦役の女優が登場人物の名前ではなく役者の名前を呼ぶ。「役を捨て、衣装を脱げ」と。役割から解放された役者たちが登場し、それまで演じていた演劇と舞台を破壊する。ひとりがマイクをとおして叫びはじめ、舞台を去って行く。「世界は劇だ。俺も劇だ。」「劇は終わった。俺は町に出てゆく。」「劇は終わった。このあとはきみたちの番だ。」「たかが言葉で作った世界を言葉でこわすことがなぜできないのか。」「ここには何も無い。何も無いのだ。」「俳優を役柄から解放せよ。そして劇を劇場から解放せよ」と。残されたのは崩れた舞台と誰もいないステージ、そして観客。無残な姿で「終演」となる。演じられたことそのものに自己言及し、演劇のフレームが壊され、虚構が暴かれて

いく。

「邪宗門」の最後、いままで演じていた舞台の大道具が解体されていく。演劇のなかで演劇を支えていた基本の装置がなくなっていく。その過程をみせつけられる。しかしこれも「邪宗門」という演劇の一環であるという枠はなお残っているのだろうと、観客はそこにいる。劇場が破壊され、役者が役と仮面を脱ぎ捨てた後にみえてくるのは何か。それは日常であり、市街である。唐十郎のテント芝居もよく観たが、大きな開放的な空間に設営された舞台が解放されて街が見えるようになっている。演劇が市街へと解放されていくという意味だ。

そこで問題は残された観客たちだ。演劇が解体されたのだから観客も解体されることになる。「こんな虚構を観ているお前たちは誰だ」と人間になった黒子や役者が挑発してくる。「観客であることを止めろ」という。

さてどうしたらよいのだろうか。このまま帰るべきなのだろうか。次々と襲いかかるようにして演劇という枠が演劇をとおして解体されていくと観客は何をなすべきなのか、虚構と現実とは何なのかと思考は混乱するように仕掛けられている。破壊は創造という体験だと言われても、いまこれからどうすればいいのか。

そのために頭を使えと寺山は言う。「どんな鳥だって、想像力よりも高く飛べない。」と。

この作品を直近、舞台で観たのは2013年の夏だった(演劇実験室◎万有引力・呪術音楽劇「邪宗門」。作：寺山修司、演出・音楽・美術：J・A・シーザー、共同演出：高田恵篤、脚本：白石征、出演：万有引力俳優陣、

岡庭秀之、渡辺敬彦、井内俊一、森祐介、曾田明宏、とりふね舞踏舎ほか、会場 座・高円寺)。

この年は寺山没後30周年であり、活発にいろいろな作品が上演されていた。初演当時と変わらないであろう案内文には、「革命の演劇ではなく、演劇の革命化を！登場人物を演じる俳優とそれを操る黒子、その黒子を操る作者、作者を操る夕暮れの憂鬱……一服の煙草の煙……。虚構と現実が入り交じる『邪宗門』は、演劇構造そのものを演劇を使って表現し、『演劇とは何か？』を問い続けた寺山の演劇論を舞台化した」と紹介されていた。1971年ヨーロッパツアー、ベオグラード国際演劇祭グランプリ受賞とある。「アントナン・アルトーが劇場の暗黒にまき散らした演劇の毒を、市街にまでまき散らそうとする陰謀と評された幻の問題作である」とも記されている。「1972年、一回限りの渋谷公会堂で伝説になった本作を、寺山修司没後30周年に再演します。」と。

「邪宗門」は1970年前後の時代状況に根ざしたものだが、2021年現在で考えると、操られている事態はさらに展開し、AIなどデジタルネットワークが背後に登場するのだろう。構図の基本はさらに巧妙になっているともいえる。

「私は本当に自由に言葉を発しているのだろうか」、「私の声と言葉は誰のものなのか」、「自分の声や言葉は独自にあるのだろうか」という冒頭からの問いは寺山の時代と変わらない。

これを加害者のナラティブへの問いと重ねていくと、男性たちの声は黒子に支配された声と言葉であるように思えてくる。その加害の陰にある黒子とは誰かを考えたく

て男性性を象る声と言葉でもあると考えたことは前号で書いた。そこで元の文脈に戻り、少し広げてナラティブは誰の声なのかと考えてみる。

### 3. 多数派の声と言葉への懐疑と沈黙

こうしたことを考えているといろいろ関連したことを引き寄せる。『HIKIPOS』というひきこもり当事者たちの声を集めた雑誌に出会った。2018年6月18日号に記されている次のような記述が本号の文脈では印象的だった。「私の母語は沈黙—ひきこもりとセクシャルマイノリティ②」と名付けられていた。部分的に引用しておく。

<https://www.hikipos.info/entry/2018/06/18/060000> (2021年5月20日閲覧、下線は筆者による)

私はいわゆる「不登校」や「ひきこもり」の経験をしてきた。その中で、養育者(親)から「原因は何か」、「話してくれないとわからない」、「不満があるならもっと言ってきたらいいでしょ」など、自分の沈黙を責められてきた。私はたしかに語らず、—暴力や暴言のない「ひきこもり」というのは、行為としても沈黙的なことに思っけれど——いねいに説明するなんていうことはできなかった。ただ反論めいた弁明をするなら、マジョリティの側にいた養育者たちも、聞くに値することはなんにも語っていなかった。ガッコウや社会を避ける私に対して、たとえば自分たちの言葉で社会に出て行くだけの意義や喜びを語る、—ということはない。

人間関係の中には、空気を読むとか察するとか、—時事的な言葉となった忖度(そんたく)とか—はつきりと言葉で伝えないコミュニケーション

ンが多い。マジョリティの社会なら、進学や就労、結婚が当りまえのものとして、深く語られる必要もない。「なぜ就労したのか？」と問い詰められたり、「男女で結婚した原因は」なんて心理分析されたりしない。語らないという意味では、マジョリティだった養育者の側にも多量の沈黙がある。少なくとも、養育者にとって私の言動が腑に落ちるだけの「原因」や「理由」の言葉を聞かなかった程度に、私もまた社会に出るだけの「原因」や「理由」にあたる言葉を聞けなかった。それはたとえば性教育を語らずにすませることのような、表だって言葉にすることを控えるだけの、半分意図的な抑制がはたらいていたということはなかっただろうか。性被害を言葉にしないことのように、公開し分析するよりも、語らないことが最も都合の良い対処の仕方だったことはないか。私に固有の沈黙があったのではなく、養育者の側や、大きくは社会的な環境に沈黙があったのでは、と疑っている。私が沈黙的なことをし続けていたにしても、それは私だけの生存戦略ではなく、空気を読んで生き方まで決定されるような、深く大きな黙(もだ)のある環境に、私が住んでいたということではなかったか。(喜久井ヤシ)

多数派の声と言葉と対比して、少数派が「沈黙」へと追いやられていく固有の経過が理解できる。養育者という距離を置いた言い方だが、親たちの声と言葉は届かないどころか、こうして悩みながら、その声と言葉に懐疑的になり、黙して語らない当事者となっていく。暴力という行動化を選択しない多くのひきこもり当事者は沈黙する。そうするとそれがひきこもりの症状としてさらに上書きして記述されていく。しかしそこにはさらに大きな、語るけれどもそれは自らの声と言葉ではない社会の多数派が

同調しているだけの、そうした言葉の羅列でしかないことを察知した当事者がいる。となるとそれに応答するわけにはいかない。世間の声と言葉を反復しているだけの、聴く力のない人たちに向かって話す必要はないと判断することになる。とはいえまだ当事者としての自らの声と言葉が醸成されていないジレンマもある。だからさしあたり沈黙とともに、行動としてひきこもりという選択をすることになる。

ここには、不登校、ひきこもり、薬物使用、病的ギャンブル、盗癖等、「逸脱行動」として烙印を押し、「問題」を語り、定義し、そこからの「解決」を支援や臨床と位置づける、一連の連続体(問題の定義、支援ニーズの確定、臨床化した対象設定、実践と技法の開発、エビデンスの構築、政策と制度への昇華等)が存在し、社会の支配的なナラティブ(物語化)として機能している事態が読み取れる。ここに宿る課題は、沈黙へと追いやる社会の無意識と聴く力の欠如の相乗作用である。それらとは別の声と言葉の展開による、また異なる連続体を再構築することの営為として当事者たちの発言がある。

#### 4. 沈黙と暴力

この沈黙へと追いやる社会の側にはもっと野蛮な暴力性が原因となっている場合もある。そのことはこの連載で何度か取り上げてきた。例えば、DV、虐待、体罰などの暴力を「関係コントロール型暴力」として定義し、そこで起こることを「サイレンシング(沈黙化作用)ー語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮」と題

して紹介した(『対人援助学マガジン』通巻第22号)。沈黙を強いることは暴力そのものである。暴力はワードを喪失させていく。

さらに広く「沈黙」が生起する環境それ自体を考えると社会病理学や臨床社会学の多様なテーマがみえてくる。語るができるのか、どのように語るのかということでもある。語られたことの外部にあるもの、排除の対象、ネグレクトされてきたこと、被差別対象等がそこには横たわる。沈黙へと追いやる多数派のなかで、臨床のセラピーであれ、学術的なインタビューであれ、何かの判断のための聴取であれ、自らの手記であれ、ナラティブはいかなる磁場のなかで生起するのかを考えておくことの配慮が必要だと考えるようになった。

特に加害のナラティブは、社会のなかに存在する暴力を肯定する多数派の声と言葉を濃縮して表出している面があり、社会のもつ暴力性を行動とその後の説明として顕現させているといえるだろう。多数派の声と言葉に他ならず、暴力を否定できない社会は同調する共犯的な関係に立つ。

発せられた声と言葉のナラティブはその一部を切り取ることでしかなく、語り得ないことがたくさんある。加害の語りを聴く側にそれは誰の声なのかを聴きわける力がないと巻き込まれる。自らの声と言葉としてのオーセンティック authentic (真正) なナラティブをささえるのはこの聴く力や聴くコミュニティの形成と相関している。

この課題を自らのライフストーリーに照らして社会の課題をクリアにした研究がある。石原真衣『<沈黙>の自伝的民族誌ーサイレントアイヌの痛みと救済の物語』(北海道大学出版会、2021年)である。

オートエスノグラフィーは、日本で始まったばかりの方法論です。「まだない」言葉の創造ともいえることができるでしょう。私はこれまで、アイヌの出自を持ちながら沈黙する人びとについて、家族史とオートエスノグラフィーによって明らかにしてきました。この研究によって、様々な「沈黙する人びと」とつながり、自分がいる場所のままで、これまでとは異なる世界がみえるようになりました。異文化というのは、遠くの地へ行かなくても、みなさんの周りに溢れているのかもしれない。沈黙に関する研究は、様々な領域、地域にわたり、知的好奇心に溢れた研究です。また、無理やりに沈黙を破らせるのではなく、沈黙を生む構造について明らかにしながら、その沈黙の周りにある痛みを癒す可能性を持っています。みなさんの足元の「異文化」について、深い知性と洞察によって、新たな言葉を創造していく仲間を求めています。

と本書の導入がなされている。石原さんの研究でダウンロードできる論文から、沈黙について関連するところを紹介しておこう。以下の引用は「『サイレント・アイヌ』を描くー〈沈黙〉を照らすオートエスノグラフィーの可能性ー」(『北海道民族学』第14号、2018)からである。

私は、1982年、札幌で、アイヌのハーフである母と、和人の父の間に生まれた。母はそのとき、「北海道の歴史を正しく理解する人にしか、アイヌの血を引いていることを言うてはいけない」と私に伝えた。私は、「北海道の歴史を正しく理解する」ということがどういうことなのかわからなかったため、「アイヌの血を引いていることを言うてはいけない」というメッセージのみを受け取った。アイヌの血を引くということを知ったところで、家族や親せきは、家庭の中においてですら、アイヌ

臨床社会学の方法(33) その「ナラティブ」は誰の言葉なのか  
—沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声—  
(中村正)

という言葉が絶対に語らない状況の中で、私は生きてきた。人に言うてはいけない秘密があるということがおぞましかったが、アイヌの血はみえるわけではないし、アイヌの血を引くということは、いつもリアリティがなかった。私の曾祖母は、唇の周りに入れ墨を施していたという。アイヌの伝統的な風習であったその入れ墨も、同化政策の下で禁止され、曾祖母が生きた時代には多くのアイヌが入れ墨を施さないという選択をしていた。曾祖母は、子どもの頃に無理やり大人たちによって入れ墨を施されてしまった。その入れ墨は、生涯ステイグマとなり、曾祖母がコタンから出て隣町に住む娘や孫に会いに行くときには、ほっかむりをして隠す他なかった。当時は、和人の子どもがアイヌの老を見ては、「あ、イヌがきた」と言ってからかう時代だったのだ。・・・そこで、就職して、社会的基盤も安定したころ、周囲の人々に自分がアイヌの血を引くことを伝えてみた。すると、「あなたがアイヌでも気にしない」とか、「アイヌも日本人と同じでしょう」と言われた。差別はされなかったが、対話の余地がなく、和人には自分の混乱や心情を、理解してもらえないのだと思い、アイヌの人々との出会いを求めた。しかし、アイヌの人とあって、知れば知るほど、共有するものがないことに気が付いた。アイヌ文化に関する集いはあるが、アイヌ文化に対して親近感を持ってない私にとっては、その場が苦痛だった。・・・私は、アイヌと和人の両方の血を引くが、文化や経験といった背景は、そのどちらも有しておらず、私の足場はどこにもなかった。自己をアイヌとも和人とも同一化できないため、自分が何の当事者であるかもわからず、どのように語ればいいのか、何を研究すればいいかもわからず、沈黙は深まるのだった。しかし、この〈沈黙〉は私一人のものではない。アイヌの出自を持つ人々の多くが沈黙しているのである。そうであれば、〈沈黙〉の所在を明らかにし、自己の存在を歴

史化することで、「サイレント・アイヌ」が生きる世界の一端を明らかにする必要があるのではないかと考えた。

さらに石原さんはカミングアウト体験を語る(同論文)。「(カミングアウト後)すると、『あなたがアイヌでも気にしない』とか、『アイヌも日本人と同じでしょう』と言われた。差別はされなかったが、対話の余地がなく、和人には自分の混乱や心情を、理解してもらえないのだと思い、アイヌの人々との出会いを求めた。しかし、アイヌの人とあって、知れば知るほど、共有するものがないことに気が付いた。アイヌ文化に関する集いはあるが、アイヌ文化に対して親近感を持ってない私にとっては、その場が苦痛だった」と記している。二重に重なる中空に浮かぶ様子がうかがえる。特に、他者の反応のなかにも共生を強いる同化的な反応への抵抗は重要だろう。そうした属性を気にしないこととして平等を語るべきではない。反差別の根拠をどこに求めるのかという点では大事な箇所だ。

こうして石原さんは、アイヌの血をひく家族の歴史を生きてきたことの意味の探求と、社会の課題、そして研究の有り様を重ねていく。石原さんは「〈沈黙〉を照らすオートエスノグラフィー」の必要性に至る。

「従来の『研究する側/される側』という枠組みによるエスノグラフィー論の限界を提示し、近年発展している当事者研究を批判的に継承しながら、『サイレント・アイヌ』を照らし出すための方法論として、オートエスノグラフィー論を刷新したい」と結論づけられている。

沈黙は「隠す」のみならず、「言葉の不在」

や「第三項の排除」と関連している。この第三項とは多数から周辺へと排除されていく対象のことである。不可視化されていくという意味では当事者としても立ちあらわれにくい。その意味で第三項とされる。第三項を全体で排除する構造ができて初めて互いの承認が実現し、人びとは安定した「仲良し」状態とその社会的な秩序を楽しむことができることとされている(今村仁司『排除の構造—力の一一般経済序説』ちくま学芸文庫、1992年)。「社会的排除論」として現在でも有意義な視点だ。石原さんの研究はアイヌの家族の歴史のなかを生きることの意味の探求と重ねて社会を自分と家族の歴史に引き寄せていく。

沈黙との格闘から生成した知に感銘を受ける。沈黙を主題にしたここでの問いと重なるからだ。これをさらに加害のナラティブへと関連づけて考えてみたい。『教職研修』(教育開発研究所)という雑誌の2021年6月号に掲載の「学校での『差別』を考える」というコラムの原稿を引用しておく。これは何度か紹介してきたデラルド・ウィン・スー著『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』マイクロアグレッション研究会訳、明石書店、2020年)という翻訳を読んでもらった編集者から、簡単に紹介して欲しいという依頼のあったものだ。

マイクロアグレッションという言葉がある。有形力の行使としての身体的な暴行を加えるのではない三種類のマイクロアグレッションが整理されている。

第一は、攻撃である(micro assault)。言葉によ

る脅しや相手を指弾して威嚇する等の意図的な攻撃行動である。環境に埋め込まれた侮蔑的サインや言語、行為による偏った態度や信念である。明示的な軽蔑を含み、特定個人に狙いを定めて暴力的な言動を行い、攻撃する。価値を貶める、避ける等の差別目的の行為もある。

第二は、相互行為に埋め込まれているもので、ステレオタイプや無礼さ、無神経さ等である(micro insult)。軽微な無視もある。加害者に自覚のないことが多い。気遣いのないコミュニケーションをとることで人種的出自や文化の価値を貶めることになる。女性の内科医が男性の患者から看護師と間違われる等の例が挙げられている。

第三は、有色人種、女性、LGBTQといった特定のグループの人々の心の動きや感情、経験を無視したり、否定したり、無価値なものとして扱ったりする(micro invalidation)。マイノリティの心理状態や考え方、感情、経験を排除、否定、無化、侮蔑等して無価値化する行為である。一緒に訳した若い日コリアンのメンバーが話題にしていた。「留学生ですか」「日本語うまいですね」「日本に何年居るのですか」と聞かれることが多いという。その瞬間、在日コリアンである存在が無化された感覚を持つと語る。

さらに厄介なことがある。こうしたことをしている側から謝意が示される場合である。その謝罪がマイクロアグレッションとなることがある。「あなたを傷つけてしまったならごめんなさい。」「自分を害したようなので謝ります。」等である。相手を傷つけた自己が立ち現れてこない。加害が内省され、自らの発言や行為がもつ差別性に向き合おうとする謝罪ではない。傷つきやすい被害者が話題になっている。「あなたの感受性、考え方、さらにいえば脆弱性に由来する傷つきなので、その点について謝罪します」と言わんばかりなのである。

こうしたことに気づきを与えてくれるマイクロ

臨床社会学の方法(33) その「ナラティブ」は誰の言葉なのか  
—沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声—  
(中村正)

アグレッションという言葉で身の回りを眺め直し  
ておきたい。

先の石原さんの経験に重なると考え紹介  
した。内なる声と言葉のもつバイアスに気  
づくためにだ。

### 5. 多数派のなかにいることからの脱出

男性の加害者の多くはジェンダーとして  
は多数派の中を生きている。暴力加害者の  
ナラティブはジェンダー秩序を反映してい  
る。沈黙のなかにいるのではなく、暴力行  
動が説明される。しかしそれは男らしさの  
声なので、自分の声と言葉ではないことほ  
とんどだ。そうした加害を語る言葉からど  
のように脱していくのかは声と言葉を異な  
る連続体へと接続していく際に必要な視点  
だ。加害者との対話はまずは自らの多数派  
体験の気づきからという点で参考になるの  
で紹介しておきたい。

小学生のころに、父の職場に胎児性(母胎内で有  
機水銀に侵され生まれたひと)の患者の方が遊び  
に来てたんですね。胎児性のひとたちとはずいぶ  
ん関わりが深く、近所にたくさんいらしたし、親  
と同世代ということもあって、可愛がってもらい  
ました。あるとき胎児性の患者の方が一人で歩い  
てきたのを見て、友だちがみんなで真似をはじめ  
たんです。お前も真似せいやと言われて、真似をし  
たんですね。真似しないということができたら  
よかったですけど、私はその場で自分を守った。  
それが自分の、水俣病との最初の苦い思い出なん  
です。それからずっと、水俣病という自分のなか  
にはそのことがあって。大人になってから、自分が  
外から差別を受けるという経験もしたんですけど、

ひとに対しての加害というか、水俣病の原因をつ  
くったということではない、別のところでの加害  
というものがありません。経済が発展して豊かに  
なっていく過程で水俣という地域が置き去りにさ  
れ、踏まれていったその上にいまの私たちの暮ら  
しがあるんですね。そして、その延長上に私たち  
は生きている。認定を受けないひとたちとか、こぼ  
れおちたひとたちを放置した、関心を持ってこな  
かった私がいる。この社会を構成している私たち  
一人ひとりが実は加害者なんだと思うと、自分も  
当事者になってしまう。被害者でなければ加害者  
だとは言い過ぎかもしれませんが、そういうつ  
もりでいます。みんなが何かしらの当事者だと。

差別する側に同調していた体験の居心地  
の悪さを感じて水俣病患者の相談に携わる  
永野三智さんの取り組みである。多数派か  
らの脱出のライフストーリーとして理解で  
きる(ころから株式会社(2018/9/12)『み  
な、やっとの思いで坂をのぼる—水俣病患  
者相談のいま』水俣病センター相思社。2021  
年は水俣病公式確認の1956年から65年目  
となることもあり紹介した)。

加害の言葉を紡いでいくことはいかにし  
て可能か、戦争体験をはじめとして加害の  
ナラティブ研究と実践はこの課題をひきう  
けなければならない。

### 6. そして男たち

加害のなかの男性たちの声と言葉、それ  
は語るけれども自分の声と言葉ではない。  
マイクロアグレッションに気づいたり、永  
野さんのような差別する側に同調していた  
体験からの脱出があったり、石原さんのよ  
うな中空にいるなかでの沈黙を自覚したり

する、つまり自らを変容させていくような機会に暴力加害者として登場することで気づきへとつながっていくとよいと思いながら、加害者臨床や研究に取り組んでいる。できれば他者にも自己にも否定的な影響を与えてきた、支配的な声と言葉にまみれた男性性からの脱出をして欲しいと考えての対話で紡いでいきたい男性たちの声と言葉であるが、これが実に難しい。

ハームリダクション（有害性のある問題を除去していく制度）の政策と実践は、対人暴力の場合は脱暴力プログラムへの参加を指示する「受講命令制度」の構築としてアプローチできたとしても、そこにおける加害者臨床の組成と実践には相当な工夫が必要となる。支配的な声と言葉で反省や謝罪を語られても、変容にはつながっていかない。

支配的な声と言葉は男性的主体へと「呼びかける」。それに応答して生きてきたとすると長い間の主体化の歴史があるからだ。そうしたライフストーリーを相対化するのが脱暴力プログラムである。時間の逆戻しとなり、生きなおしを迫ることになる。自らを変容させる声と言葉の構成をめざす対話の必要性であり、借り物の支配的な声と言葉ではないものを創り出すことへの協働するナラティブとなる。

2021年5月30日受理  
社会病理学・臨床社会学  
中村正